

随想 元旦に起きた大地震

(株) P P Q C 研究所 加藤 宏光

今日は一月二十八日、元旦からもう一か月近くが過ぎてしまった。

新しい正月を迎えた時、東京にいた。不思議なことに、能登の大地震では東日本大地震の折りとは随分違い、天井から下がっているシャンデリアがユラユラ揺れただけで、体感するほどの揺れは感じなかった。

早速テレビニュースには地震の速報が流されたものの、先に述べたように体に感じる大きな揺れがなかったため、後に報道される程の大事が発生した、との認識は乏しかった。警報で告げられた津波についても、当初はニュースでは「数十センチ」のことで、申し訳ないことではあるが、緊迫感に迫られることはなかった。

正月明けの仕事初めでスタッ

フ達と顔を合わせても、正直みんなにも、地震に対して強い印象を受けている印象はなく(もちろん話題はあったものの)、そのまま週が明けて、著者はスエーデンの学位をお願いしている大阪公立大学への出張に出かけた。十七日には恒例の中国出張であり、七日から十六日の間にはSNSにより、できるだけ能登の大地震の情報は触れるよう心がけていたため、半島であるため遮断されていた交通等が繋がりに従って、発災当初に報道されていた被害に比べて桁違いの大災害の実態が徐々に分かってきた。また、それと同時に、この災害に対応する、今の行政の手ぬるさが次々と明らかになってきた。

災害に際して常に活躍する自衛隊が『倒壊した家屋や降起、陥没さらには津波で寸断された

道路を、リュックを背負い被災地へ向かっている』という報道に、感動させられたが、その後、別の報道に愕然とさせられた。今年一月七日に、アメリカやイギリス、フランス、さらにはインドネシア等と合同で年初めの降下訓練を実施するために、陸上自衛隊第一航空隊は、正月初めから前日までその練習にかりきりであったとのことSNSによって知らされた。

大地震がおきたのが一月一日の午後四時一六分、寸断された能登半島各地の状況を知るに最も適した第一航空隊は、その後六日まで、降下訓練に時間を潰していた。この実態には、かつて最悪と評された(著者も全く同感)民主党政時代の菅総理のヘリコプターによる原発の上空からの視察を彷彿とさせる愚

である以上、自衛隊が訓練でなく出動するのは当然であるべきであり、また、本来文官主導を本来とする自衛隊が、その最高責任者である内閣総理大臣の指揮に従うことを旨としている以上、この頼みに自衛隊には責任がない。指揮権を有する現職の総理大臣の政治判断がズレていると断じざるを得ない、としている。

著者に一月十七日から二十一日にかけて海外にいたため、その間のテレビや新聞の報道に接する機会がなかった。少なくとも一月二日からは出発までの公共報道では、能登半島各被災地の実情をつぎつぎに知らせているニュースは少なかつた(記憶している。そんなこともあって、著者は帰国するまで能登半島大震災へ大きな関心を寄せなかつたが、帰国後NHKやその他の被災者実態の現状をYouTubeで見、改めて実感するに至った。

著者のラボが福島県二本松市に位置しているため、東日本大震災を肌で感じたが、いずれにしても、行政の対応・態度は痛痒くじれない。民主党政権下での原発事故へのアナウンスも実態に対して発表は相当に抑えられて

いたため、返つて不安を煽る結果となつたが、今回の北陸電力でも、事故に繋がらなかつただけ、実は相当危機に瀕していたと聞く。しかし、一時報道では油漏れは数滴とされたがその実は七、〇〇〇リットル以上であったとか、活断層が原発に掛かり原子炉そのものが四層の隆起により破断されていればどうなつていたのか、等を知ることが、この国の行政者の感覚と判断で今後どんな事態がどのような運びになるのか心配になる。

もし、大地震によつて情報や交通が分断、破壊されている能登半島へ先の第一空挺団が来訪されている海外の軍隊とともに、多数のヘリコプターで物資を携えて降下しているなら、被災者の安堵感はいかに高まるのであつたらうか?! 今回、海外の軍閥連者を招いての年初の降下訓練を実施した。一方で自然災害という形で非常事態が発生している状況下であるのか、と問われれば「非常事態で採らねばならない行動を速やかにするため」と言えよう。ならば実際の非常事態であるこの機に、日ごろの訓練の成果を顕すことこそ自衛隊の真価を

国民に認知させる機会であつたらう。それを敢えてさせなかつた、ときの総理大臣には、危機管理能力があるのだろうか、と疑つてしまふ。

報道のなかに、避難民へ握り飯を提供しているビデオがあつた。避難民同士が共生するために有志が組織を形作り、その組織で炊き出しを行つたうえで、握り飯を作っているようであるが、避難している人々の食べる握り飯一つひとつがラッピングしてあつた。非常の時に衛生管理にまで気を遣う「民の力」を実感する。

注：国防も疎かにせず!

今年の「降下訓練始め」世界八か国による国際演習に陸上自衛隊

Yahooli news:1/7(日)17:12 配信

『即応対応能力を維持するため二〇二四年一月七日、一令和六年降下訓練始め』を千葉県の習志野演習場において実施し、志野演習場はわが国唯一の落下傘戦闘部隊であり、航空機からパラシュートを使つての空挺降下

行である。SNS情報を確認するため、インターネットでの詳細を調べてみた(注)。確かに一月七日に二〇二四年の初降下訓練の実施が紹介されている。その中には能登半島大震災の中で、あえてこの訓練が実施された意義が述べられている。しかし、その文面には『能登の大震災に引き続き他の場所でも同等あるいはそれ以上の大震災(あるいは危機)が生じて直ちに行動できるように、云々』といった言ひが記述されている(著者には、その言ひが記述された文面をYahoo!ニュースの記者が考え書いたとは思えない)。

SNS情報の解説でも、自衛隊が国防を前提として設置され、それゆえに、災害でも救助活動は国防の最たるもののひとつ

や、ヘリコプターと連携した迅速な展開、いわゆる「ヘリボーン」等といった空中強襲を戦い方のメインにしています。【フランスやカナダの兵士もいるぞ!】令和六年降下訓練始めの状況をイッキ見「降下訓練始め」は第一空挺団が実施する年始の恒例行事となつていますが、その目的はその年一年を通じての降下安全を祈願するためのものです。なお、例年であれば開始当初に団長や最先任上級曹長等が空挺降下を行う「指揮官等降下展示」が行われますが、今年が行われず、国防を想定した空挺・ヘリボーン作戦を行う「地上訓練展示」のみ行われました。また、「降下訓練始め」は他国軍隊の空挺部隊との交流の機会にもなつており、昨年はアメリカ、イギリス、オーストラリアが参加しています。今回の「令和六年降下訓練始め」では、さらに輪を広げて世界一か国の空挺部隊にも声をかけ、最終的に昨年参加したアメリカ、イギリス以外に、カナダ、フランス、ドイツ、オランダ、インドネシアの兵士も訓練展示に参加していました。

以下略